

## — 鉄 鋼 ニ ュ ー ス —

**昨年の世界鉄鋼生産**

昨年の世界各国鉄鋼生産を見ると、アメリカが1億tの生産で第1位を占め、続いてソ連が約4,000万tで2位、3位は西独の2,100万t、4位がイギリスの2,000万t弱ということになっている。これでイギリスは西欧におけるトップの地位をはじめて西独にゆずつたわけである。

ソ連は1930年の580万tから、昨年の4,000万tにまで上昇したが、1960年までの今後5カ年間に50%の増産、すなわち6,000万tまでの生産を計画中である。

1950年から1955年までの間に、世界の鉄鋼生産高は10,000万tから23,700万tと急激な上昇をみせている。今日アメリカの生産高は全世界の47%を占め、それに次ぐソ連は19%、西独とイギリスはそれぞれ約10%となっている。

**世界の亜鉛鉄板の生産及び輸出**

日本鉄鋼連盟の調査によると1954年における亜鉛鉄板生産の実績では、アメリカが250万tと圧倒的に多く、ついで日本の66万t、以下イギリス33万t、フランス23万t、ベルギー21万t、西独13万tの順となっている。

アメリカはドブ漬の連続メッキがほとんどで75%を占めているが、冷延ストリップコイルの供給力と相俟つて国内農業部門の需要度いかによつては今後更に増産が予想されている。イギリスはここ数年に急上昇したが1955年は前年と大差がない32万t程度と見られる。欧州大陸諸国ではフランス及びベルギーが主要生産国で、西独はその割に生産が少いが1955年には15%程度の増産になるものと見られる。

1954年の世界輸出量は大体87万tだが1955年には約95万tに達し前年に比べ10%増加することになる。亜鉛鉄板は国際景気の影響を最も敏感に受けるため変動が激しい品種だが、各主要輸出国とも1952年以降の上昇ぶりが目立っている。

輸出国別に見ると1954年に日本は25万tで世界総輸出量の3割近くを占めて首位であり、1955年は28万tで同様首位はゆるがぬもよう。イギリスは濠洲、ニュージーランド、英領アフリカ向けが殆んどであり、生産の半分近くが輸出向けとなっている。フランスとベルギーはともに属領向けが殆んどだが、生産に対する輸出量は1954年にそれぞれ50%、80%と高い比率を示している。アメリカは相当量を輸出しているが、生産の殆んどが国内市場向けで輸出は6%程度に過ぎない。仕向地はカナダ、コロンビア、フィリピンなどである。西独は生産の殆んどを国内市場が吸収している。

輸入国は一般に半工業国及び未開発国で、英領東アフリカ、濠洲、ニュージーランド、マレー、インドシナ、コロンビア、インドなどが主要市場である。東南アジアは1954年に30万tを輸入したが、供給の73%は日本が

占めた。輸出向けに要求されるものは極薄物に集中される傾向があり、ハンドロールに依存する度合いが強いので日本の輸出競争力は強力性、強靱性をもつものといふことができる。

**鉄鋼設備近代化計画**

通産省では新しい長期設備近代化計画に着手した。新計画の方向は第2次合理化計画(目標32年度)までの圧延、加工部門重点主義を根本的に改めて、製鉄、製鋼設備の拡充と鉄鋼原料の確保など鉄鋼生産の基礎となる能力の拡大をねらっている。計画の内容は(1)高炉と転炉の新增設、(2)鉱石専用船の建造、(3)海外鉄鉱石供給源の積極的開発とこれに併行した港湾設備の改修、(4)電気鉄、特殊鋼の設備近代化促進などに重点を置いたものになる見通しである。

**電気鉄の増産**

特殊製鉄協会では、このほど電気鉄メーカーの31年度生産計画をまとめたが、これによれば東北砂鉄鑛業、日本高周波鑛業、矢作製鉄、日曹製鋼などの各社案の合計は253,000tと30年度の見込み実績に比べて8割増になつており、また、このため主要電気鉄メーカーでは現有能力の約3割に当る設備の新增設計画を予定している。

このような電気鉄の増産は、(1)鉄鑛業の活況に伴い鉄源が不足していること、(2)高炉鉄の供給能力が設備面からみて限度にきていること、(3)高炉鉄のコスト高で電気鉄の採算が相対的に有利になつたことなどによるものとみられている。

**30年中の特殊鋼生産実績**

日本鉄鋼連盟ではこの程30年中の特殊鋼の生産実績をまとめた。それによると、昨年中の特殊鋼熱間圧延鋼材の生産は一昨年の実績に比べ90%ふえ、318,000tとなつている。これを品種別に一昨年の実績と比べてみると、工具鋼は37,890tで18%増、構造用鋼は170,364tで7%増、特殊用途鋼は110,461tで9%の増加となつている。

さらに出荷部門別の実績では、機械工業が全体の出荷量の32.2%、車両工業が23.4%を占めている外、輸出及び特需が7.7%と多くなつているのが目立っている。結局生産増加の原因は機械、車両工業からの需要増加のためで、これらの工業がさらに活発になる31年の特殊鋼需要は一層増えるものと予想される。

**映画『製鉄』『造船』の完成**

日本鋼管株式会社ではかねて総天然色映画「製鉄」「造船」の2編を製作中であつたがこの程完成した。この映画は同社の第1次設備合理化計画の完了にとともに新たに企画されたもので、「製鉄」4巻「造船」2巻からなつており、製作は岩波映画製作所が担当したものである。